近代におけるろう染めの受容－小合友之助が見出した染色工芸の可能性－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学芸術資料館 公開日: 2019-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松井, 菜摘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/00000254

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

近代におけるろう染めの受容

－小合友之助が見出した染色工芸の可能性－

松井　菜摘

【抄録】

本学のろう染め教育の基礎を築いた小合友之助が，ろう染めでの制作を始めた理由は，作家が一貫作業を行い，毛筆によって自由な個性を出しやすく，誰でも簡単に出来る技術ということにあった。当時女性の手芸に向くともいわれたろう染めが，どの程度一般にも普及していたのかを大正から昭和，終戦前にかけての出版物を通して明らかにし，小合がろう染めを選んだ背景を考察した。ろう染めは，鶴巻鶴一による復活から，産業界への流通，作家による作品制作，学校教育での指導，一般女性の手芸への普及へと展開した。雑誌や書籍で平易な解説や図で紹介され，誰にでも実践しやすいものであった。明治の終わりに復活した古くて新しい技法であり，一般にも認知が広がる新しい時代の工芸技法であるろう染めに，小合はそれまでの工芸とは異なる表現の可能性を追求した。

１．はじめに

小合友之助（1898―1966）は，京都市中京区の友禅の型彫師の家に生まれ，本学前身の京都市立美術工芸学校図案科を卒業した。古裂の模写や図案制作に携わりながらろう染めで制作を始め，昭和 7 年第 13 回帝展で《臈纈和楽壁掛》が初入選した。戦前・戦後と「彩工会（のちの綵工会)」や「母由良荘」など染織作家の団体に属し，染織作品の創作性を求めて制作に励んだ。戦後，本学の前身である美術大学工芸科染織専攻の教員となり，ろう染め教育の基礎を築いた。

小合の先行研究については，村松寛「小合友之助－その時代、その作品」『小合友之助作品集』（注１）や京都府京都文化博物館学芸第一課編『～染の創作～小合友之助・稲垣稔次郎展』図録（注２），外舘和子「染めの日本的造形史観－京都を中心に－」『近現代染色の展

開と現在』図録（注３）等が詳しい。村松は同論文で，小合がろう染めを選んだのは，「一貫作業が可能であり，それだけ作家の自由な個性が発揮しやすいこと，さらに毛筆の味が生かせること」（注４）を理由として挙げている。また小合は，染織の古典を学び，新しい技法や染料の研究を続けていたが，「創作は技術より表現である」という信念のもと，ろう染めという「だれでも出来る技術で，だれにも出来ない表現を」（注５）追求したという。

村松の同論文では，一貫してろう染めは誰しもが知る平凡な技法と語られ，また「女性の手芸の題材に向く」（注６）とも述べられている。しかし今日の日常生活において，ろう染めにふれられる機会は極めて少ない。本稿では，ろう染めという技法がどの程度一般にも普及していたのかを大正から昭和，終戦前にかけてのろう染めの技法を解説した出版物を通して明らかにし，小合がろう染めという技法を選んだ背景を考察する。

２．ろう染めとは

ろう染めは，溶かしたろうを布にのせ，防染する染色法である。ろうを筆に取り布に置く方法，インドネシアのジャワ更紗（バティック）のチャンティンやチャップ（注７）でろうを置く方法などが知られる。日本の上代の文献では“蠟纈”の表記で伝えられ，現在でも蠟纈（ろうけつ／ろうけち），蠟纈染め，ローケツ染めなどとも呼ばれる（注８）。その起源は諸説あり，インダス文明時代の西インド説や中央アジア説等が指摘されているが特定はできていない（注９）。発生後はヨーロッパや東南アジア，中国へと広く伝播した。日本での最古の実例は法隆寺裂の幡が知られており，7 世紀後半から 8 世紀初頭の製作とされている。正倉院宝物から 8 世紀に臈纈が流行したことがうかがえ，10 世紀の『延喜式』まで記述が遺る。しかし中・近世以降の作例は伝えられておらず，技術が衰退，断絶したと考えられている。

ろう染めの技法は，明治末期に京都高等工芸学校（現京都工芸繊維大学）の色染科長であった鶴巻鶴一によって改良され復活した（注１０）。インドネシアのジャワ更紗や正倉院宝物の蠟纈に刺激を受け，研究を重ねて復活に至った。明治 44 年の京都高等工芸学校卒業式で，「蠟纈」と名付けた卓被や帯を発表し，京都の産業界を驚かせると，鶴巻の「蠟纈」は大丸や髙島屋などの百貨店で売約され，海外にも輸出された。この流行に応えるべく，京都工芸高等学校の工房だけでなく，奥村延治郎の工場でも大量生産された。大正 4，5 年頃まではこの 2 カ所以外では生産されていなかったが，他の工芸家たちが大正 10 年頃からろう染めでの制作を始めるようになった。大正 2 年の第 1 回農商務省工芸展では，鶴巻が審査員としてろう染め作品を出品するのみだったものの，大正 13 年の第 1 回京都美術工芸会展では，楠田撫泉がろう染めの壁掛を出品した。その後楠田に続いて皆川月華や小合がろう染めでの制作を始め，昭和 2 年に新設された帝展工芸部に出品を重ねていった。

３．出版物にみるろう染めの普及

鶴巻の「蔦纈」登場以前から，正倉院宝物等に見られる蔦纈は書籍でも紹介されている。横井時冬編『日本工業史対照図』（吉川半七　明治 31 年）に「正倉院御保存　纈纈　来纈　臈纈」，小杉榲邨・横井時冬『大日本美術図譜』（吉川半七個人出版　明治 34 年）に「正倉院御物　臘纈　東京帝室博物館御陳列」，黒川真頼『黒川真頼全集』（国書刊行会　明治 43 年）に「纈纈臈纈夾纈考」等がある。大正以降もより詳細に染織史を通して蔦纈を研究する書籍も出版されていくが，本稿では割愛する。

鶴巻の「蔦纈」以後，大正後期からろう染めの技法を広く一般に伝える書籍が出版されるようになる。その内容は，読み手の対象を 3 つに分ける傾向がある。1 つは学校教育における指導者向けのもの，2 つ目は家庭の手芸向けのもの，3 つ目はろう染めの歴史や技術の専門書である。

４－１．学校教育における指導者向けのもの

学校教育における指導者向けのものとしては，浅川卯一郎『手工染色教材精説』（大同館書店　昭和 3 年）がある。ろう染めに限らず広く染色について記述されている。「序」には，染色は女児教育に適し，「美的陶冶」及び「工業的陶冶」の上でも価値があり，染色を通して家庭に科学的知識をもたらすなど染色の意義が語られ，同書を用いて染料や薬品などについて知識を深め指導に活かしてほしいとある（注１１）。本編 1 頁目には，書名と著者名が再掲されているが，書名には「小学校参考」と冠してあり，小学校での指導を意図していることが分かる。ろう染めについては，第 7 章「簡易臈纈染」で紹介している。まずジャワのバティックの技法について簡単に触れ，これに対して簡易な臈纈として筆で溶かしたろうを置く方法を紹介している。このほか，佐藤佐『中等学校小学校に手工を教ふる人へ』（文翫堂書店　昭和 4 年）の中でも，筆でろうを置くろう染めの方法を簡単に記し，またジャワのバティックについてもふれている。

４－２．家庭の手芸向けのもの

鶴巻の「蔦纈」発表後，出版された書籍の中で筆者が確認できた最も古いものが，上野正『家庭実用趣味之臈纈染』（辻文化堂出版部　大正 12 年）である。上野の染色研究の成果をもとに家庭でも可能なろう染めを勧めている。同書の「自序」には，「誰れにでも極手軽にすぐ家庭に応用ができる様に書いたもので、換言すると一般家庭婦人並に女学生が、実際上に於ける参考の一助となさん為に編述した」（注１２）とある。しかし、臈纈の歴史やジャワ更紗の解説から，繊維や染料などの材料，素材別の染色法，染色の化学的原理まで，専門的な情報がまとめられており，高度な印象がある。

一般女性の関心をより引いたのは，雑誌に掲載されたろう染めの記事であったろう。上野

の同著と同年に，藤井達吉「素人にも出来る臈纈染の仕方」(『主婦の友』7（５）5 月号　主婦の友社　大正 12 年）や齋藤五百枝「新しい染物の仕方(臘纈染)」(『主婦の友』18（9）9 月号　主婦の友社　大正 13 年）等が発表された。齋藤の記事には口絵で作品の写真も掲載された。

昭和 3 年には，ラジオ放送でもろう染めの技術は語られた。それは新坂紫舟「臈纈染の話」として社団法人日本放送協会関東支部編集『婦人子供服の裁縫と手芸』(ラヂオ講演第 3 編第 10 輯　社団法人日本放送協会関東支部　昭和 3 年）に掲載された（注１３)。ジャワのバティックの技法が女性たちによって発達したことを引き合いに出し，家庭の手芸に染色，特にろう染めを勧める内容になっている。浅川卯一郎『手工染色教材精説』と同様に，バティックのチャンティンを用いる技法ではなく，筆によってろうを置く技法で語られた。

越水忠夫『家庭染色手藝法』(東京手藝染色協會　昭和 5 年）も，全くの素人でも染色の初歩から理解できるようにつくられたものである。漢字には全てふりがなもふられている。繊維の性質や精練，漂白方法から染料の性質，染め方まで説明し，段階を経て難易度が上がる構成になっている。冒頭には，「染色芸術諸家代表作」として岡田三郎助，藤井達吉，広川松五郎，木村和一らの作品がモノクロ図版で掲載されている。藤井達吉は「染色手芸の目的とその進むべき道」と題した序文も寄せ，家計を管理する上での染色の有用性や日本女性による手芸の発展を勧めている。ろう染めについては第 16 章「趣味の各種芸術染色法」の中で「蔼纈染」として紹介され，技法や図案において一定の型にはまったものではなく，自由に模様の表現ができ，無限に個性が発揮できると述べている点が興味深い（注１４)。そしてろう染めに適したろうや生地，用具の説明やろう置きの注意点が語られ，「模様を白く現す法」や「模様を着色して現す法」等作例ごとの解説が続く。

新坂紫舟『手芸教材染色芸術』(文書堂　昭和 6 年）も，女性や初学者向けに出版された。染色の素材・技法全般について紹介し，カラー図版や挿図も多い。ろう染めについてはやはりジャワ更紗を紹介した後，「新しい蔼纈染」として筆によるろう置きの技法を紹介している。またろう染めを応用した「エッチング染法」や「皮革の蔼纈染」も記されている。皮革のろう染めについては，澤九皐「革皮の臈纈染に就て」(『帝国工芸』2（9）帝国工芸会　昭和 3 年）が先行して発表された。革染は武具において特に発達し，明治以降は日用品で用いられるようになり，革にもろう染めの流行が及んだ。革の種類や革に適したろう，染料の紹介，革染めならではの注意点や揮発油での脱ろうなど，絹や綿とは異なる点が多く掲載されている。「革の臈纈」と題して『手芸エンサイクロペヂア』(第 2 編　婦人之友社　昭和 4 年）でも紹介された。基本の材料，用具，注意点を記し，「みゝづく模様の二つ折紙入れ」や「渋い好みの臈纈ハンド・バック」など染めの技法だけでなく図柄とそのアイテムの作り方をセットで教えている。完成見本の写真や図案，裁ち方やとめ金の位置などの図も挿入され，誰にでも分かりやすい内容になっている。

昭和 4 年の『婦女界』40（5）では，「素人手芸品誌上展覧会」と題し，読者の作品を紹介している。これは，東京で実際に展覧会を開催し，誌面にも写真を載せている。さらに入選

作の中から，簡単にできるものや応用のしやすいものを選んで誌面で解説している。第 3 回目となったこの展示の第 1 会場に，臈纈染の帯とショールが出品され，素材の説明や染める上での注意点などが記されている。

中央公論社編『婦人公論大学』第 17 手芸篇（中央公論社　昭和 7 年）は，ろう染めだけでなく図案や刺繍，紙細工など手芸全般の技法をまとめている。ろう染めについては，安藤佐久子「臈纈染（蠟纈又は蠟染）」で臈纈の由来から価値，用具や素材，制作工程など図版入りで紹介している。

桂屋染色試験所編『家庭染色法』（桂屋商店　昭和 15 年）は，巻頭から技法ごとの染め見本が掲載されている。カラー図版も多く，技法の違いも分かりやすい。繊維と染料，染色法の概要を説明し，絞り染，板締染，友禅染，描友禅染，蔦纈染，芋版染其の他の手芸染色と各技法の解説が続き，混色と配色の理論が語られている。内容は簡潔に整理され，挿図もあり理解しやすい。

富田輝夫・上田柳子・服部静枝『学校家庭衣料更生染色精義』（東洋図書　昭和 19 年）も，繊維，染料，各染色法の解説がなされ，他の解説書と基本的な構成はかわらないが，終戦前年ということもあり時局を反映した記述も見られる。第 2 章「防染に属する染法」第 7 節「蔦纈染（蠟染又はバチック染）」で，ろう染めの材料，用具，作業工程，ろう染めの応用が語られているが，「蠟落し」の項目で揮発油を使用しない方法が述べられている。染料が乾いた後，ろうを揉み落し，新聞紙の間にはさんでその上からアイロンをかけて残ったろうを紙に吸収させる方法である。

４－３．ろう染めの歴史や技術の専門書

新坂紫舟『臈纈染の研究』（建設社　昭和 9 年）は，ろう染め専門の研究書として出版された。日本におけるろう染めの歴史からジャワ更紗の技法，布や染料の性質，ろう染めの技法，薬品解説等を記載しており，構成としては他の技法書と大きな違いはない。しかし各項目はより専門性を高めた記述となり，特にジャワ更紗の歴史や制作方法などそれまでにない詳細なもので新坂の研究の成果がまとめられている。

５．ろう染めの受容

読み手の対象ごとにろう染め技法の解説書をみてきたが，その構成内容は出版が始まった当初から大まかには変わらない。布や繊維，染料，染色法等の解説にろう染めの歴史やジャワ更紗についての言及が加えられたものが多い。上野正『家庭実用趣味之臈纈染』のように当初はやや難易度の高いものもあったが，家庭でもできる技法が婦人雑誌に取り上げられ，またより平易な文章で記され見やすい図解付きの書籍も登場した。今日の手芸本のようなバリエーションに富んだ実制作の方法のみを掲載したものもあり，ろう染めの一般女性

への浸透をうかがわせる。

またろう染めに限らず，染色は一般家庭の婦人や女子が身につけるべき技術として推奨されていた。これは，女子教育の先駆けである女紅場で裁縫等の手に職をつける教育がなされてきた流れを汲むものであり（注１５），人工染料の発達等，染色の材料が手に入りやすくなったことも関係すると考えられる。その中でもろう染めの普及は，溶かしたろうを筆に取り布に置いて防染をするという平易な技法や，越水忠夫『家庭染色手藝法』でも語られていたように，技法や図案において一定の型にはまらず，自由に模様の表現ができ，無限に個性が発揮できることが女性の手芸愛好に歓迎されたのではないだろうか。

戦後も引き続き，美和正忠『臈纈染』（柳原書店　昭和 26 年），田中たま・滝浦潭『衣類整理の実際』（光生館　昭和 29 年）など染色や手芸についての解説書が出版され，ろう染めも紹介された。昭和 30 年代頃からは，柳原芳野「臈纈染の研究」『大谷女子短期大学紀要』1（大谷女子短期大学　昭和 30 年）等の大学での研究論文，被服や繊維等の研究会誌にも取り上げられ，専門機関で科学的な研究対象としても扱われるようになった。

６．まとめ

大正から昭和，終戦前にかけてのろう染めの技法を解説した出版物を通して，ろう染めが特に女性の手芸に受容された点を確認してきた。鶴巻による復活から，産業界への流通，作家による作品制作，学校教育での指導，一般女性の手芸への普及へと展開し，ろう染めは「だれにでも出来る技術」であることは明らかであった。平易な技法でありながら，作り手の個性が発揮できる点は，まさに小合がろう染めを選んだ理由に合致する。明治の終わりに復活した古くて新しい技法であり，一般にも認知が広がる新しい時代の工芸技法であったろう染めは，友禅のような作業が細分化された技法ではなく，一人で全ての工程をコントロールし，表現の可能性を追求できるものでもあった。小合は「貧しい内容を技術の外装で飾るアカデミズムを厳しく警戒した」（注１６）と言うが，ろう染めを選んだことは技術に依存せずとも創作はできるというアンチテーゼであり，またそれまでの工芸とは異なる新しい考え方や制作アプローチに可能性を見いだしたからであったと言える。

注１　村松寛「小合友之助－その時代、その作品」『小合友之助作品集』有秀堂　昭和 47 年

注２　京都府京都文化博物館学芸第一課編『～染の創作～小合友之助・稲垣稔次郎展』図録　京都府京都文化博物館　平成 2 年

注３　外舘和子「染めの日本的造形史観－京都を中心に－」『近現代染色の展開と現在』図録　茨城県つくば美術館　平成 22 年

注４　注１の 4 頁参照。

注５　注１の 9 頁参照。

注６　注１の５頁参照。
注７　吉本忍「ろうけつ染の源流から現代へ」京都造形芸術大学編『染を学ぶ』角川文庫　平成 10 年　83－84 頁　チャンティンは線描や点描の手描きろう置き道具。薄い銅板を接合して作られたろう溜めと細い口金，葦の茎等を使った把手の部分からなる。チャップはジャワ更紗の量産を目的として 1840 年頃から使用されているろうの押し型。
注８　松本包夫「正倉院のろうけつ染」京都造形芸術大学編『染を学ぶ』角川文庫　平成 10 年　68－69 頁
注９　ろう染めの起源から日本での衰退・断絶までは注８を参照。
注１０　明石染人「鶴巻鶴一博士と近世の臈纈」『宮崎友禅斎と近世の模様染』宮崎友禅翁顕彰会　昭和 28 年，尾形充彦「正倉院の臈纈と鶴巻鶴一博士のロウケツ染めー奈良時代に廃絶し、明治時代に甦った蝋防染ー」『繊維学会誌』68 巻 5 号 794　繊維学会　平成 24 年，和田積希「鶴巻鶴一」，青木美保子「臈纈」『京都　近代美術工芸のネットワーク』思文閣出版　平成 29 年
注１１　浅川卯一郎「序」『手工染色教材精説』大同館書店　昭和 3 年　1－2 頁
注１２　上野正「自序」『家庭実用趣味之臈纈染』辻文化堂出版部　大正 12 年　1－2 頁
注１３　社団法人東京放送局（現日本放送協会）は，ラジオ放送を開始した大正 14 年から連日各界の有識者による講演番組を放送した。その内容が『ラヂオ講演集』として発行され，昭和 2 年からは『趣味講座』『通俗科学講座』などジャンルごとの講演集として発行された。（宮川大介「『ラヂオ講演集』①～放送草創期のメディアミックス～」放送史料探訪　『放送研究と調査』NHK 放送文化研究所　平成 30 年　84－85 頁）
注１４　越水忠夫『家庭染色手藝法』東京手藝染色協會　昭和 5 年　147 頁
注１５　泉敬子・倉田まゆみ「女子教育の変遷にみる女紅場について」『生活科学研究』13 文教大学　平成 3 年　47 頁，京都市市政史編さん委員会『市政の形成』京都市政史 1　京都市　平成 21 年　103－104 頁
注１６　注３の 12 頁参照。